

正校

北窻瑣談

後篇

一

1曾5

234

5



北窓瑣談後編卷之壹

梅華仙史橘春暉著



一 肥後ヤマトの藪やぶ茂も下先生。大坂の仲井ななゐ若わか右先生みぎの先生初はつ多た坊ぼう  
ひしひし向むか冬ふゆああううがが為な羽は織お衣ぎ着きたり。仲井ななゐ怪あやししとて。いつか  
れれむ先生せんせいゆるゆる衣いを着きままとと同おなししふふ茂も了りょう着きてて函はな符ふを  
まま出でりりししとといいふふしし

一 丹後たんごの田邊たべ城じやう下げより三里斗さんりどう田舎いなかの溝尾みぞおとといいふ所ところより。医い  
生せい其そのりり学がくひひししるるのの有ありりししおお其その物もの語ごふふ在ありり所ところをを紙し考こうとといいふ  
ものもの成なりりししとといいふふ事こと亦またふふりりてて初はつとといいふふ。又また正月しょうげつの門かど表あはれ  
初はつとといいふふ。又また麻あ上かみ下もととといいふふものものもも玉たま珠たまりりししとといいふふ。備ひ西さい京きやう

234  
234

融るるに僅に廿四五里の地とてよくを質拍くのどし又日向  
 小高岡とて所を藩守領とて御士の七八百軒も集り任  
 せり於城とて頗る嚴密華の土地あり。繩とてよきありて。婚  
 礼ありの高座のりて。貞は素とて。鹿思島の侍階りの  
 唄をうたふるも。是を少くも。於都の遠の成又人気が  
 厚き也。

一因懐の河田ハ駒周易新疏を著して後。折師ハ物語ハ  
 家技編とてよくも是程の作乃切著とて。いづれも。いづれも  
 なる。

一近江項太閤真顯紀とて。字本河ハ玄太郎とて。數百卷ハ

及なり。太閤時代ハ軍物語を委細に記して。俗に悦しむ  
 書なり。世上ハ實録なりとて。是ハ大坂の淨瑠璃本ハ  
 作者近松並本多流とて。言成面ハ作り連とて。近  
 年淨瑠璃芝居作りとて。作者ハ仕業也とて。いづれも。色  
 々ハ敵ハ強勁也とて。軍物語の作りとて。言成面ハ作り  
 て。俗人を悦しむ。利をばかり。淨瑠璃本ハ。婦女子近ハ。初ハ  
 ぞ。とて。なる。事をよく。知り。居て。害ハ。なれ。と。も。な。れ。と。是。等。ハ  
 皆實録体ハ。作り。たる。もの。也。俗人婦女ハ。其。實。の。り。と。お。ひ。ひ  
 女ハ。物。知。り。人。と。り。も。數。百。年。の。後。ハ。真。偽。あり。と。人。ハ  
 遂。に。を。生。し。よ。人。を。ハ。何。と。出。傳。く。悪。し。人。を。よ。く。云。傳。く

んとして無念のふりして作者ハ大なる罪を犯すべし。されど憎む重く歎  
くをたふすなり

一醫術の妙小至れる者ハ扁鵲あり丈夫にして医を志すハ扁鵲が  
とくあるべし医を以て衣食を計るものハ術の妙小至る  
変叶ふべし後されば身の境界も扁鵲がとくあるべし  
此一段人の甚だ難んむる取まして世間ハ扁鵲あきゆん

一五雜俎曰鶴即鶴也漢黃鵠下建章而歌則曰黃鶴  
一梓和名アツサ書籍を彫るハ梓とありとむるといふ又梓木  
成以て推小作墨臺ハ極むなり日本ありむりハ多たものと  
然るふとめてハ真の梓木とありとむるといふ人稀なり余ハ之く人

小尋問ハ美の梓といふものいふも俗キサケ又アカメカ  
シハなむりよもの本州物産の学有同ハ美の梓ハありす  
とあり平松殿琴の裏板の用として美濃ハ梓山の梓の本を求  
らるしを葉の形をいふなりや余も其板ハ用するも葉を  
知らず後ハ五雜俎に續たりしと記梓也椅也櫃也楸也豫  
章也一木而數名者也云々唐土也ハ辨ハ一がた本ゆく  
同種類の物と思つるされむキサケハアカメカハハハ何づか  
といふも總ハ何れも産し  
一前のは前侯書汝善くもそ印章ハ毛夷惣鎮と彫るなり  
又北門鎖鑰と彫るもなり其ハ他の人ヲ用らるる印章也

一二重切の花生その世ハ何方も用中れも無風流の物も  
けと若し利休乃以と拵手物も花乃けはる小田  
しものよし。茶へおし人も是を無花物と云ふ。又狭き  
智恵も無おをうけらる上よ亦花をも生たるハ無あたる  
けり掛おり花う一方やいといふ事もし

一榮花物語を足れど圓融院乃御物と云。後小菰系氏乃傳  
りし小野道風等の萬葉集貫之自筆の古と集あを足  
えり。然ふその代も古筆を果ぶ人乃。要之自筆の古と  
集の序紙と所拵せる人多し。余が親たる人の家も是を藏  
えり。榮花物語の以り希代の珍物なり。今々世序紙

コノ一

とくも無双の重宝なり

一蘭偶先生中年を過る以までの書ハ。余毎夜又及びし。大  
小に父兄の著り。然る人乃物語不。蘭偶晩年の物語  
に学問も父兄の及ぶ。但書ハ是も女し。勝まりと覺ゆと  
いれしとぞ。いづかや

一肥後秋田山の洗竹綺々世上風流。何嘗至此間。歌窮  
飛鳥。露洗竹出前山。生後敷茂。洗竹の綺々。洗竹  
見青山。々々露羊規。不見山。猶可唯恨月出。遲寄。言山中  
抱琴。客来踏林。間初月白。敷茂。吟。作。拵。る。り。似  
より。然れ。よ。山。の。綺。絶。て。日。幸。の。風。味。無。し。

コノ一

一元の謝宗可の縁物の詩は釜の莫音を瓶筆と作する。松  
 風盤眼ふとりの古したるを瑞々々たるの形的切の形容せし  
 体よ世乃詩人の奇字を競ひ用ゆるも故に死のありき  
 一俣後福山の家中肉麻何某とよ人或付縫よかよましに  
 鴛鴦を又付たしむむ杖を挿す小をすまきりてま  
 中よ入りぬむ。竹の上より頻りおめて尋求ぬれども法に  
 又多のぬ。皆能くぬ僕又尚も草中よ蛇死し死する  
 告しむ。肉麻ぬて杖をかたろえとしむ。因に蛇死ぬ何げ  
 肉麻の向の。烟竹の煙乃とれよの成吹けりるがを。烟肉麻  
 うたの月ふあがりて蛇ハ生海倒れ死しむ。肉麻が眼像よ

痛てそれ何なり寒熱ゆき苦惱言んかか。既に命もまら  
 ぶくもそし種よ。肉麻煙草のやふ乃蛇又毒を殺す我思ひ  
 出して煙管のやたを眼中よ入し。漸くよ腫消し痛も  
 やりて一日中よ苦惱退る眼赤死がかりたる。六日く小  
 中よ入きたるに五六日して今癒ゆる。至聖年を時  
 又眼痛ゆしたるふ。色々の眼科医の治療を絶しぬれも癒  
 さるし。蛇毒の毒を思ひ出し。又煙管のやたを入し。小  
 忽ち愈たり。二三年も経たず必眼目痛をハハリし。至  
 後ちやたを入して癒ぬ。此事村上孝峻お語りたり。又云蛇  
 をおし人ち蛇を雷門と云人少く。毒お尚もし人ハ生を癒す。



合せし内蔵なりとぞ

一同福山の夜中ふゆやまらして雌幕を踏殺せし小生雌

幕凌る回一方の足乃内踝の所ニ雌幕の息をりて生

所はさす熱湯をそぐが如かるし。されより生所次所小

腫て痛む半浪かき寒熱を去りて数日恒しが色々治療

を起す漸愈し。生望年々時多小到るを人故無

く頃死せり。雌幕の毒殺せしける所し。是れを時乃物

語りたりと

一糸を以て鼠の肛門を縫塞せし放ち去りしむれども鼠殺狂

しく生家内乃鼠ハ不殘咬殺せしを就中不しく強

た鼠よりし。無きも鼠人を咬り人咬り回死

小到るものも有りたる也

一或日去る御御の御物語小むし或人定家ハ浮野物語と

事實淫毒の多たふいおれに世上小如くすて珍重せり

小やし尋し小業門答し。か殺りの小峰文素乃美かると歌の

勝きたるを愛するもひり。事實ハ金馬門ハ強きたる也。維喬

れ。い。無念の事なり。業平朝臣尚侍ハ何をも不平の事

あり。故小自ら行いを穢し。金馬門ハ強きたる也。維喬

乃御子御位小昂るを外戚乃忠仁ハ勢ハ依り。維喬御子

我位小昂るも有り。唐土ハ義兵を以て討げ。首陽山



ゆり遊るづれを奉朝の奉勢いよなるる何りてんさる事とや  
内しふの業平金枝玉葉の自然とてそ位總中將小在  
て維喬の御子乃北の雪汝も傍のまゝ二尺五寸の菰乃花小  
も迷懐の和歌汝依しける乃内思の如く成し又五代と  
祈るの歌きのみふと乃哥かひ只ひてまゝの放蕩遊治乃人  
のよまほむを哥うらむ人品さふ成し然る系極其門をさめ  
千歳乃後さむ心只ひてまゝの遊治好色の人との思の居るハ  
いと不意なれとていふ汝をいふ思ふと語りぬし此  
卿も自ら憤るゝのありて穢行のゆゑ思ふを感して業平  
の事を語りぬるや

一楠正行軍功ゆよりて美女を賜りて成辞しきりて

~~~~~  
さそが楠公の子ありける千歳の後も是を唾まればなると止  
笑か

一三好長慶京都某殿の連歌乃今ふ何里々々乃属さるる声  
乃一とくとら又向む難むかれと一座付娘のくむるをり  
弟早歩の使來りて長慶も表成むと長慶又終りて下り  
水た此付分程と某の中受付り成しと暫く思按し  
古泥の海方より程とかりてと亦出したるは一座皆秀  
逸を尋ね難せり長慶座中向ひて又まゝと早使來りて

舎身實體泉列の終る只今抄配付り終まりの味方敷少及  
有りよ事之長慶此所より出陣しし之の流るる生みの  
此の多めり成るる多めり此の相くすまき付りかたりと  
捨て出陣せしれしとぞ

一和泉守岸和田領能名谷とよ所よ四ツ子を産ま泉列成田  
在道物語なり寛政七年乙卯妻のこぞ

一余嘗て保氏物語を及る時保氏の君の琴をよりしめて  
廣陵散の曲を弾ししりとりしりしり此曲を晋の阮籍小  
て絶たるる我保氏の弾ししりしりしりしりしりしりしり  
れむと不審乃事なりと思ひしりしりしりしりしりしりしり

の顧況廣陵散乃紀を引く唐瑯琊王淹り女未嘗弾此曲  
云々されば唐の世やるる廣陵散の曲を伝くしりしりしりしり  
邦の藝事唐網をまふしりしりしりしりしりしりしりしり  
小此曲を弾せし人なりしりしりしりしりしりしりしりしり

一翁字といふ書ハ京都の土神次何某致仕の後杜はと名案  
く市中小隠き位多時依なり翁州二石巻成就しり  
後於近年の奇事多れし筆を免かしりしりしりしりしりしり  
付る書四五十巻を著せり皆近世の實録あり上王公より  
下庶民に到るやその雜事を録せり此杜は齡八十四也の時余  
於多し知る人ぬかりて問尋て隔意なく物語せり温厚柔和

の質もて 隠居せし後ハ世事を 經營まゝに 毛路をかりも毎一  
突小世外乃真隠かりた老後ハ再聲て物語り皆字後人  
或時余彼菴を尋て倒の筆後の中余の著述乃傳ふも 遠  
慮なれ奉まゝに絶く。世間をくハ物かたるも亦うかひ  
々々に 府色を正し。足下ハいふに 壯年の事われは 終つ後著  
書も多うなれし 平帯の事ハ随分柔和めて 毫毛がちぢるよ  
一但糸を扱てハ 柳も遠慮の心を 起さぬう。此 遠慮し  
世間小憚りもハ實を多ふ奉まゝに 著る者も書ふハ 天子將  
軍の御幸にても 柳遠慮まゝに かく實事のみを直筆し  
紀を是れども 親類朋友毎度 練免ていふ小字存せしむ

いふし。世間ハ 儉出傳はたてりなし。ハある忌諱の事よ  
う 觸まざる 罪をほすたての 小何れを 貴の御事ハまを  
一あふんしとく。此一事ハ 親友の徳に 従ひかゝ。強  
て中切く 居まゝに 蘇る實録ハ後世も 傳ふも 思ふ 善悪  
も 小侵すハ 人乃 過ち 小言 貴の御人の ありて  
も 小狂て 實を覆ふるを 欲せむ。此 實録乃 奉小付て  
罪をほむ。八十の老の 乃 白髪首 削らるも 恨あり 筆記の  
奉小付て 小初より 一命を 差出して 録するも 世間ニ 貴乃  
人の 悪も 憚りも 取れり。嫉妬人乃 善事ハ 稱美する  
人 稀りて 遂に 世に 埋るも 歎息を たり 到り 足下

これ一筆を批してハ何事よき遠慮あるやうすと  
縁起一云いさし。傳はる所の志穀然として奪ふやうに次  
古の良史此風なる人ありた

一往年唐土より大清會典とい書を関東へ献せし事乃有  
し。其中今乃清朝と清和原氏乃流きふし。原義經の  
末裔なる事を載せり。然れど唐土日本周縁なり。亦ゆ  
下し。此書官より若原某より。其副本一部を長崎の唐通  
事神代氏藏し。後多て家藏と成。神代乃子息太仲某  
乃るをし。今書白紙摺りて二枚き。よそ云美濃の某  
書をり。をと。之仲某へ寄る。吾々余と同街の時物語なり

此書白石先生乃以金史別本載たり。と。色々油は  
一可し。事あり。白石も半信にせし。新安手筒の中  
小中ん又えり。今後も年久家傳方めて珍奇の結と成  
存する事あれども。早竟ハ浮鏡ある所し。然る小神代子  
實小又えり。今奇中の又奇なる事あり  
一今後經局を我邦の清和原氏唐土の祖先なり。と。いふこと  
大清會典とい書み出たり。と。いふを。浪花の兼葎堂の主  
小物語し。彼ぬし。先年々の大清會典を所抄せし。と。い  
後或緒候に奉りし。其書十六帙あり。と。云。美濃の書乃仕  
立たり。兼葎堂のぬし。と。いふ。清和原氏乃事さ。と。いふ。及む







の文中小乃えしる例に依りて用ひし。世乃人多く此語に何  
 乃書出所あり。此字は何處出處ありと云。皆川乃史記助字  
 法凡例などにも是を出處と云。元來出處とりハ士乃朝  
 小出くはよると家小處て過るとの事。然るに何の書此出  
 處ありしと云。毎覺東事と思ひし。佐野少進物語に老  
 学菴筆記小。今人解杜詩但尋出處不知少陵之意初不  
 如是云々又東處と云事。何り通鑑注云作文不可無來處  
 云々又野客叢書劉尚錫曰詩用僻字須有來處云々是等  
 の事。道世の人乃りし出處小近。又冥谷子のりハハ出所と  
 云んよ。六所出と云。之猪と云。と云。之猪と云。思ひし。

一甲斐小鶴の郡小二千餘年乃霧あり。從來三羽あり。云々  
 元録年間一羽死せり。二羽の殘り。何り云々。寛政五年  
 何方へ去り。云々。又云々。土俗乃悦小。昇天し去り。云々。此霍  
 乃郡ハ富士山の麓。湖水も多。衆山連。後。奇妙乃  
 僻地なり。云々。霧の郡と名付。事小。此霍。不。故。云々。霧の  
 関。云々。所。云々。山。外。ハ。霧。出。云々。官。小。也。  
 昔。云々。先年。霧。の。死。時。也。役人。下。向。云々。子  
 細。を。改。羽。毛。ハ。悉。官。へ。細。云々。土俗。云。傳。云。秦。の  
 徐福。富士山。來。り。仙。藥。を。求。め。云々。遂。小。秦。小。解。云々。  
 此所。任。して。後。小。霧。小。化。云々。此。事。甲斐。小。車。轉。





肘乃僧圍因師物語なり也

一張仲景真像漢長沙太守服章進賢冠兩梁

皂紗罩衣 中衣白 袴絺白 青綾 劔 笏

後漢輿服志云進賢冠古緇布冠也文儒之服也前高七

寸後三寸長八寸公侯三梁中二千石以下至博士兩梁

進賢冠仲景像佐野山陰先生考可なり左記也

一天明四年甲辰筑前那珂郡志加嶋少て農夫地と穿ち

て金印を好む。方八分許。高廿三分。螭鈕高四分。重二十

九錢。文曰漢委奴國王五字。小篆なり。余も其印の押

切を足し。其以を評し。漢朝より日本の天子を封じたる

金印なりと云つり。篆刻家おのの鏡るも至製真は漢朝の  
 制度小叶り偽物ありと云つり。浪華の上田秋成考云  
 後漢書東夷傳光武今本光武誤作建中元二年倭奴國奉貢朝賀使  
 久自称大夫倭國之極南海也光武賜以印綬云々然其  
 今穿出せる金印ハ光武賜ふ所の物也。中元二年ハ日本垂仁  
 天皇八十六年小南也。今の天明四年まで千七百十餘年の  
 及び。委奴國ハ日本ハ惣號小何古昔筑紫ありし里  
 名なり。魏志ハ云々伊都國即是なり和名抄ハ筑紫ハ  
 怡土郡あり又同國宗像郡あり。怡土ハ里ハ漢子通せ  
 一委奴國主り奉命なり。又伊都津彦伊都縣主等の号



併るへしし云々秋成の考ハ明白ハ云々

一寛政の初余嘗て伏見に在る以痢疾をやと久く砂居  
 々々。百度小近き利して後ハ飲食も絶て數日小及び傍よ  
 了乃ハ大に危れた傳ちしり。余ハ心もろ神精也しハ疲れ  
 ぎ唯身の極勞せり。數日絶食の後も自ら手足  
 張る。動もせずを好む。ひもろ尊上よのハ所居もろ。身と  
 鼻も殊ろ外もろあり。耐下ハ疔後二ツ三ツハ漏て。ろよ  
 芋大根の類ハ物小到りて。ろハ何を煮る今ハ何を料理を  
 ろしそ。臭を委細ハ知る。常ハ小ハ脚ハ白ハあき物  
 張る。ゆめ。鼻を穿つ。程ハ覚えて難義せり。又入ハ疔後



歌夢あて傳來し。久楚と云。出經きりかぶし。殊に祭祀に用ゐ  
と何れハ空業堅ぢる。疑何ぶ。我必も千餘年の古  
物ハハかる事ハ傳り居る。と云

一伊勢本居宣長の門人ニ編掛大平といふ人。其の哥ハ師ハ  
猶きり。と世上評を常小とみ。其所古体なるが。於高ハ新古  
今集の體をもよそり。其の中ハ網落花といふ題あり

宿りて山極戸の如くけきのあ乃花ハまけ夜乃ま  
其の状殊ニ務けり人ニ唯和哥の上をあるのみ。ゆゑ  
一乃の如く宿ハあ小埋きて谷乃雪一帯りそとあ。此哥ハ範

永鋼の一生乃秀送とて自續せし。きしよ。其以て感

人ハゆるし。を後ハ清輔朝臣乃獨リ彼哥主の意ハ通せり  
と云。し。並。喜暉按らる。一乃字ハ作ハ何  
其。成。小。秀。逸。容易。ハ。分。れ。和。歌。ハ。何。う。城。然。る。小。南。時。乃。評  
繪。ハ。さ。さ。る。卷。ハ。も。毎。り。ハ。歌。ハ。中。乃。し。し。し。り。ハ。難。し  
故。ハ。也

一續後撰集西園寺殿の歌小

枯らして云の葉ハ。其の生。昔。系。何。を。恨。の。野。遠。れ。秋。風  
自。ら。も。よ。ま。お。れ。せ。り。と。覚。え。お。り。も。秀。逸。なり。と。て。と。や。ま  
ハ。大。一。か。る。歌。の。肉。細。なり。其。ハ。云。葉。と。の。ハ。一。首。乃。次。乃。後  
し。と。云。極。面。ハ。く。よ。ま。お。れ。せ。た。る。哥。あり。喜。暉。ハ。強。て。よ。れ。哥

よき物とて深く伺ひし入る時ふハ知らざりて此境小入る事  
あり。梅古乃真の秀逸とて加はれよと之を思ふに  
久方乃光りも深き喜乃果志つむかく花のちかしく人  
申らば戸残後る人々も然なき切まらざる意の如く  
結ふ手の帯小濁る山の井乃河を人々もあはれめらる  
任吉れ松を秋風吹くふく急打流る伴はとて浪  
大なる月夜もめてし是そよのほりれハ人の志とあるもの  
是等の歌々初より面をくよめて養ひ成るんと巧くし  
工末乃痕なき。実小起凡乃作らるる神し。されど其の秀逸ハ  
強て勤めてほめたものなり。修りなり力多しくねる

人乃見識多たふよれりし

一費之躬恒の優劣を人の間し。後頼の躬恒々乃ハ易くす  
答へし。其。後頼眼力多たふ。何れを躬恒の

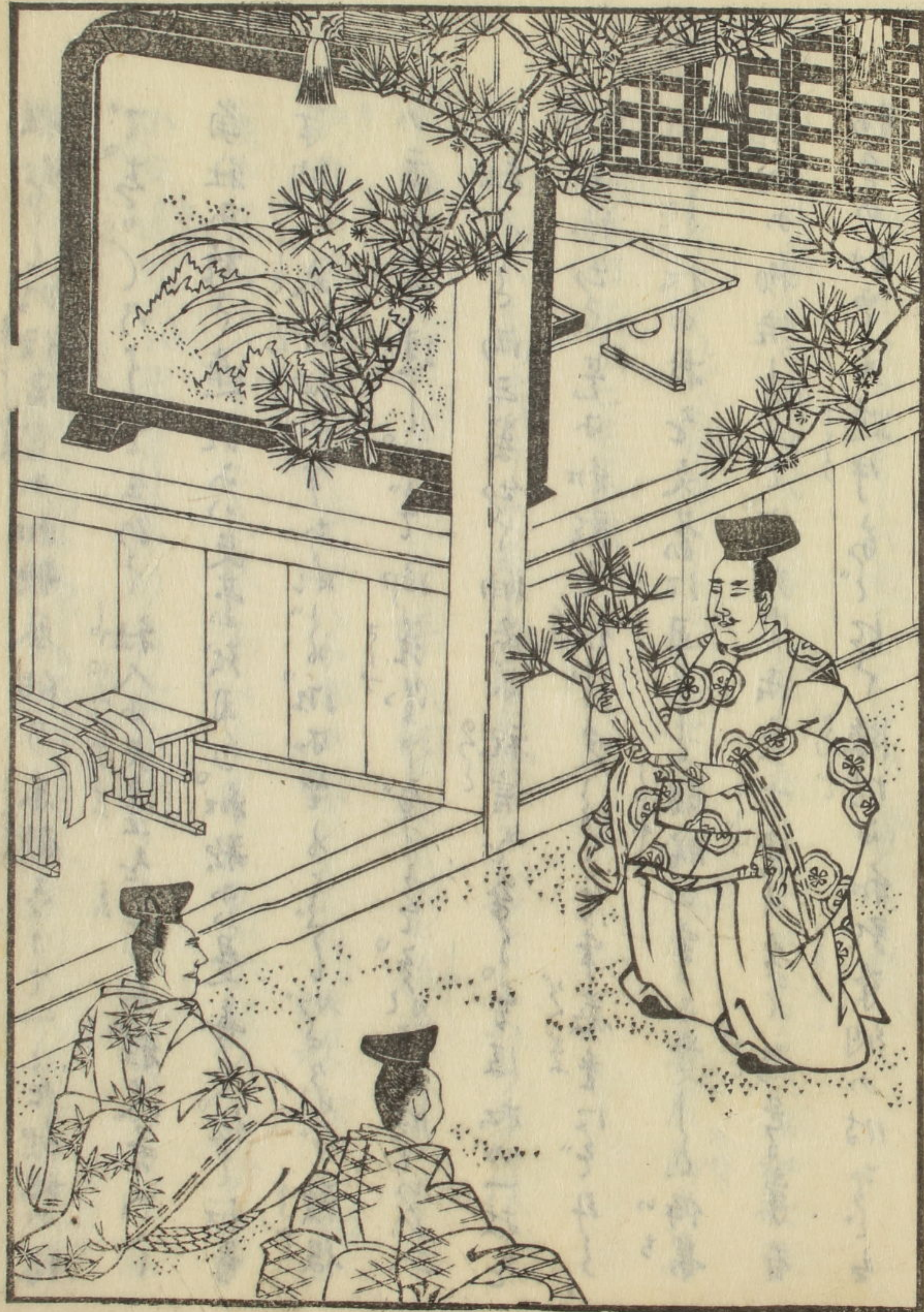
山甲々秋々々々。後し。其。麻の。鳴き。同を。覚つて  
わ。ゆる。ハ。古。拙。小。一。カ。あり。後。世。乃。人。け。る。乃。小。何。れ。次  
費。之。と。む。り。も。も。人。丸。赤。人。小。切。り。和。歌。の。聖。も。も。と。や  
と。の。後。世。理。屋。哥。の。鼻。祖。も。も。と。な。り。た。歌。々。し

懐ある本の下風は。い。い。と。て。重。に。さ。ら。ね。雪。そ。降。る  
人々も。い。い。と。さ。ら。ね。次。ね。ハ。花。を。世。の。の。多。小。白。い。と。ね  
是等。最。人。口。に。繪。交。し。た。る。もの。な。れ。も。皆。理。屋。より。出。る。歌。々

て詠凡の氣<sup>き</sup>盡し系<sup>けい</sup>小<sup>せう</sup>よ<sup>よ</sup>れ歌ハ<sup>か</sup>理<sup>り</sup>窟<sup>くわく</sup>中<sup>ちゆう</sup>余<sup>い</sup>情<sup>じやう</sup>ありて詠凡  
乃<sup>な</sup>境<sup>きやう</sup>小<sup>せう</sup>し古<sup>こ</sup>と集<sup>しゆ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>て此<sup>こ</sup>歌<sup>か</sup>を歌<sup>か</sup>らむと名<sup>な</sup>小<sup>せう</sup>立<sup>た</sup>てし  
一<sup>い</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>の才<sup>さい</sup>一の病<sup>びやう</sup>ハ理<sup>り</sup>窟<sup>くわく</sup>中<sup>ちゆう</sup>あり。理<sup>り</sup>窟<sup>くわく</sup>中<sup>ちゆう</sup>儀<sup>ぎ</sup>備<sup>び</sup>あり。和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>は  
らま<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>て餘<sup>い</sup>情<sup>じやう</sup>を感<sup>かん</sup>ず<sup>ず</sup>ふ知<sup>ち</sup>人<sup>にん</sup>や。才<sup>さい</sup>二<sup>に</sup>の病<sup>びやう</sup>ハ引<sup>ひ</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>る  
初<sup>はつ</sup>かり。知<sup>ち</sup>人<sup>にん</sup>を才<sup>さい</sup>く<sup>く</sup>け<sup>け</sup>焼<sup>や</sup>や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>し<sup>し</sup>け<sup>け</sup>く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>結<sup>けつ</sup>た<sup>た</sup>る  
去<sup>き</sup>景<sup>けい</sup>躁<sup>そう</sup>く<sup>く</sup>公<sup>こう</sup>け<sup>け</sup>し男<sup>おとこ</sup>乃<sup>な</sup>物<sup>もの</sup>を争<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>似<sup>に</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>れ<sup>れ</sup>歌<sup>か</sup>小<sup>せう</sup>加<sup>か</sup>  
け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>初<sup>はつ</sup>ハ<sup>ハ</sup>無<sup>む</sup>し。南<sup>なん</sup>登<sup>とう</sup>中<sup>ちゆう</sup>人<sup>にん</sup>はよ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>て何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>不<sup>ふ</sup>く  
う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ひ。且<sup>かつ</sup>ハ大<sup>だい</sup>や<sup>や</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>み<sup>み</sup>く<sup>く</sup>下<sup>げ</sup>を<sup>を</sup>毎<sup>まい</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>思<sup>おも</sup>ふ<sup>ふ</sup>時<sup>とき</sup>小<sup>せう</sup>  
引<sup>ひ</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>組<sup>ぐみ</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>無<sup>む</sup>し。あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>歌<sup>か</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>体<sup>たい</sup>を<sup>を</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>  
あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>歌<sup>か</sup>ハ<sup>ハ</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>知<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>無<sup>む</sup>し

一定<sup>い</sup>家<sup>け</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>乃<sup>な</sup>脚<sup>きゃく</sup>も<sup>も</sup>定<sup>ぢやう</sup>家<sup>け</sup>ハ<sup>ハ</sup>哥<sup>か</sup>と<sup>と</sup>なり<sup>なり</sup>歌<sup>か</sup>隆<sup>りゆう</sup>と<sup>と</sup>歌<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>なり<sup>なり</sup>と<sup>と</sup>評<sup>ひやう</sup>  
あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>し<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>語<sup>ご</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>。誠<sup>まこと</sup>ハ<sup>ハ</sup>風<sup>ふう</sup>流<sup>りゆう</sup>の<sup>の</sup>氣<sup>き</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>其<sup>その</sup>力<sup>ちから</sup>餘<sup>あま</sup>  
あり<sup>り</sup>て<sup>て</sup>実<sup>まこと</sup>小<sup>せう</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>乃<sup>な</sup>大<sup>だい</sup>家<sup>け</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>無<sup>む</sup>し。集<sup>しゆ</sup>中<sup>ちゆう</sup>小<sup>せう</sup>情<sup>じやう</sup>体<sup>たい</sup>具<sup>ぐ</sup>足<sup>そく</sup>し<sup>し</sup>撰<sup>せん</sup>  
る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>彼<sup>かの</sup>卿<sup>きやう</sup>ハ<sup>ハ</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>歌<sup>か</sup>ハ<sup>ハ</sup>無<sup>む</sup>し。家<sup>け</sup>隆<sup>りゆう</sup>ハ<sup>ハ</sup>乃<sup>な</sup>集<sup>しゆ</sup>中<sup>ちゆう</sup>也<sup>なり</sup>定<sup>ぢやう</sup>  
家<sup>け</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>乃<sup>な</sup>脚<sup>きゃく</sup>も<sup>も</sup>定<sup>ぢやう</sup>家<sup>け</sup>ハ<sup>ハ</sup>集<sup>しゆ</sup>中<sup>ちゆう</sup>ハ<sup>ハ</sup>家<sup>け</sup>隆<sup>りゆう</sup>ハ<sup>ハ</sup>無<sup>む</sup>し。詩<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>  
小<sup>せう</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>定<sup>ぢやう</sup>家<sup>け</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>杜<sup>と</sup>少<sup>せう</sup>陵<sup>りやう</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>。家<sup>け</sup>隆<sup>りゆう</sup>ハ<sup>ハ</sup>王<sup>わう</sup>輞<sup>たう</sup>門<sup>もん</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>  
唐<sup>たう</sup>土<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>子<sup>し</sup>美<sup>み</sup>摩<sup>ま</sup>結<sup>けつ</sup>の<sup>の</sup>優<sup>ゆう</sup>劣<sup>りやく</sup>を<sup>を</sup>論<sup>ろん</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>杜<sup>と</sup>甫<sup>ふ</sup>ハ<sup>ハ</sup>大<sup>だい</sup>家<sup>け</sup>なり<sup>なり</sup>  
王<sup>わう</sup>維<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>名<sup>な</sup>家<sup>け</sup>なり<sup>なり</sup>。杜<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>ハ<sup>ハ</sup>王<sup>わう</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>無<sup>む</sup>し。王<sup>わう</sup>中<sup>ちゆう</sup>ハ<sup>ハ</sup>杜<sup>と</sup>ハ<sup>ハ</sup>無<sup>む</sup>し<sup>し</sup>評<sup>ひやう</sup>  
然<sup>ぜん</sup>的<sup>てき</sup>倫<sup>りん</sup>なり<sup>なり</sup>

一<sup>い</sup>寛<sup>かん</sup>政<sup>せい</sup>乃<sup>な</sup>初<sup>はつ</sup>藩<sup>はん</sup>奪<sup>だつ</sup>の<sup>の</sup>士<sup>し</sup>作<sup>さく</sup>集<sup>しゆ</sup>院<sup>えん</sup>後<sup>ご</sup>世<sup>せい</sup>と<sup>と</sup>人<sup>にん</sup>彼<sup>か</sup>ハ<sup>ハ</sup>乃<sup>な</sup>系<sup>けい</sup>每<sup>まい</sup>身<sup>みん</sup>在<sup>ざい</sup>



役たし以<sup>まこと</sup>任<sup>にん</sup>吉<sup>きち</sup>官<sup>くわん</sup>小<sup>こ</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>乃<sup>の</sup>志<sup>し</sup>願<sup>げん</sup>ありて一<sup>いつ</sup>を<sup>を</sup>彼<sup>か</sup>地<sup>ち</sup>小<sup>こ</sup>指<sup>さし</sup>  
て。志<sup>し</sup>願<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>と云<sup>い</sup>ひく社<sup>しゃ</sup>人<sup>にん</sup>小<sup>こ</sup>文<sup>ぶん</sup>臺<sup>たい</sup>を<sup>を</sup>乞<sup>こ</sup>ふ。社<sup>しゃ</sup>人<sup>にん</sup>善<sup>ぜん</sup>へ<sup>へ</sup>  
南<sup>なん</sup>社<sup>しゃ</sup>小<sup>こ</sup>終<sup>しゆう</sup>と連<sup>れん</sup>歌<sup>か</sup>小<sup>こ</sup>文<sup>ぶん</sup>臺<sup>たい</sup>哉<sup>や</sup>用<sup>もち</sup>也<sup>なり</sup>。和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>小<sup>こ</sup>是<sup>こゝ</sup>無<sup>な</sup>し。但<sup>たゞ</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>  
奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>乃<sup>の</sup>式<sup>しき</sup>神<sup>しん</sup>秘<sup>ひ</sup>の奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>れども。以<sup>も</sup>由<sup>よし</sup>を<sup>を</sup>乞<sup>こ</sup>ふし。か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>ど願<sup>ねん</sup>後<sup>ご</sup>  
の者<sup>もの</sup>も中<sup>ちゆう</sup>達<sup>たつ</sup>し。やど御<sup>ご</sup>差<sup>さ</sup>臺<sup>たい</sup>中<sup>ちゆう</sup>へし。そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>より願<sup>ねん</sup>後<sup>ご</sup>の  
て社<sup>しゃ</sup>人<sup>にん</sup>も三<sup>さん</sup>葉<sup>えふ</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>前<sup>まへ</sup>小<sup>こ</sup>祝<sup>いわ</sup>言<sup>げん</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>り。そ<sup>そ</sup>は<sup>は</sup>松<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>枝<sup>えだ</sup>を  
切<sup>き</sup>り持<sup>もち</sup>て。是<sup>こゝ</sup>小<sup>こ</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>を<sup>を</sup>供<sup>くわ</sup>じ<sup>じ</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>く奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>せ<sup>せ</sup>に<sup>に</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>斗<sup>と</sup>  
ひ<sup>ひ</sup>多<sup>た</sup>に。松<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup>枝<sup>えだ</sup>を<sup>を</sup>文<sup>ぶん</sup>臺<sup>たい</sup>に<sup>に</sup>用<sup>もち</sup>り。と<sup>と</sup>強<sup>ちやう</sup>勝<sup>しやう</sup>の<sup>の</sup>奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>せ<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>併<sup>いっ</sup>集<sup>じつ</sup>  
院<sup>いん</sup>氏<sup>し</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ぞ。古<sup>こ</sup>社<sup>しゃ</sup>官<sup>くわん</sup>居<sup>い</sup>小<sup>こ</sup>古<sup>こ</sup>宮<sup>みや</sup>小<sup>こ</sup>多<sup>た</sup>く<sup>く</sup>残<sup>ざん</sup>る<sup>る</sup>奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>せ<sup>せ</sup>有<sup>あ</sup>  
何<sup>なに</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>社<sup>しゃ</sup>中<sup>ちゆう</sup>も<sup>も</sup>途<sup>とちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>。際<sup>さい</sup>時<sup>じ</sup>小<sup>こ</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>じ</sup>なり<sup>なり</sup>と<sup>と</sup>ぞ

コレ

是<sup>こゝ</sup>小<sup>こ</sup>似<sup>に</sup>より<sup>り</sup>なる<sup>なり</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>所<sup>ところ</sup>なり<sup>なり</sup>也<sup>なり</sup>

一<sup>いつ</sup>乙<sup>おつ</sup>卯<sup>みづ</sup>の<sup>の</sup>春<sup>はる</sup>去<sup>き</sup>る<sup>る</sup>御<sup>ご</sup>方<sup>かた</sup>へ<sup>へ</sup>来<sup>き</sup>る<sup>る</sup>奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>じ</sup>あり<sup>あり</sup>。折<sup>せつ</sup>着<sup>しやく</sup>南<sup>なん</sup>社<sup>しゃ</sup>和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>の<sup>の</sup>  
御<sup>ご</sup>會<sup>かい</sup>なり<sup>なり</sup>。是<sup>こゝ</sup>奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>乞<sup>こ</sup>ふ。場<sup>ば</sup>合<sup>あひ</sup>を<sup>を</sup>春<sup>はる</sup>月<sup>つき</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>  
我<sup>われ</sup>揮<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>たり<sup>り</sup>二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>一<sup>いつ</sup>着<sup>しやく</sup>ハ

花<sup>はな</sup>多<sup>た</sup>ハ<sup>ハ</sup>奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>せ<sup>せ</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>善<sup>ぜん</sup>く<sup>く</sup>夜<sup>よ</sup>祭<sup>まつり</sup>終<sup>しゆう</sup>つて<sup>て</sup>お<sup>お</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>乃<sup>の</sup>夕<sup>ゆふ</sup>月<sup>つき</sup>  
と<sup>と</sup>誦<sup>じゆ</sup>出<sup>しゆ</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>ハ<sup>ハ</sup>其<sup>その</sup>殿<sup>どの</sup>乃<sup>の</sup>評<sup>ひやう</sup>也<sup>なり</sup>。終<sup>しゆう</sup>つて<sup>て</sup>お<sup>お</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>乃<sup>の</sup>夕<sup>ゆふ</sup>月<sup>つき</sup>  
初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>祭<sup>まつり</sup>所<sup>ところ</sup>を<sup>を</sup>乞<sup>こ</sup>ふ。七<sup>しち</sup>八<sup>はち</sup>分<sup>ぶん</sup>周<sup>しゆう</sup>小<sup>こ</sup>誦<sup>じゆ</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>。和<sup>わ</sup>歌<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>善<sup>ぜん</sup>く<sup>く</sup>  
夜<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>祭<sup>まつり</sup>と<sup>と</sup>ぞ。不<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>あり<sup>あり</sup>。な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>も<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>乃<sup>の</sup>夕<sup>ゆふ</sup>月<sup>つき</sup>  
小<sup>こ</sup>力<sup>りき</sup>過<sup>か</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ハ<sup>ハ</sup>是<sup>こゝ</sup>も<sup>も</sup>下<sup>した</sup>乃<sup>の</sup>夕<sup>ゆふ</sup>月<sup>つき</sup>と<sup>と</sup>ぞ。誦<sup>じゆ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>乃<sup>の</sup>夕<sup>ゆふ</sup>月<sup>つき</sup>  
中<sup>ちゆう</sup>々<sup>しん</sup>一<sup>いつ</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>誦<sup>じゆ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>乃<sup>の</sup>夕<sup>ゆふ</sup>月<sup>つき</sup>と<sup>と</sup>ぞ。又<sup>また</sup>夕<sup>ゆふ</sup>月<sup>つき</sup>と<sup>と</sup>ぞ。奉<sup>ほう</sup>納<sup>なつ</sup>の<sup>の</sup>時<sup>じ</sup>あり<sup>あり</sup>。

○社田





律を引ひしり。勿論音声のを写して切つたるものなり。法小傳  
 て切つたる後、西より、法小傳ハ體源抄より、切つたる恩徳院の法  
 藝として、法小傳律の法能なり。俗氏ハ俗人家の舎才なるが  
 出家して、恩徳院に任ぜらる。焉室ハ遠小後乃人として、春日  
 局の舎才又恩徳院の任持なり。春日局の肉才ハ國初より  
 以てハ、法小傳ハ、西より、人あり、廢る元和乃、西の人なり。乙卯の  
 年十月十七日、法小傳再ハ、東儀出雲守、林日向守、林雅樂大  
 允同道して、遍照心院塔中、實奉院より、律法を又終日  
 吹合して、試みて、法小傳を、西より、

六孫王遍照心院什物唐土傳來之字平調板  
大サ厚サ廿真ヲ  
寫ス此圖ノ如シ

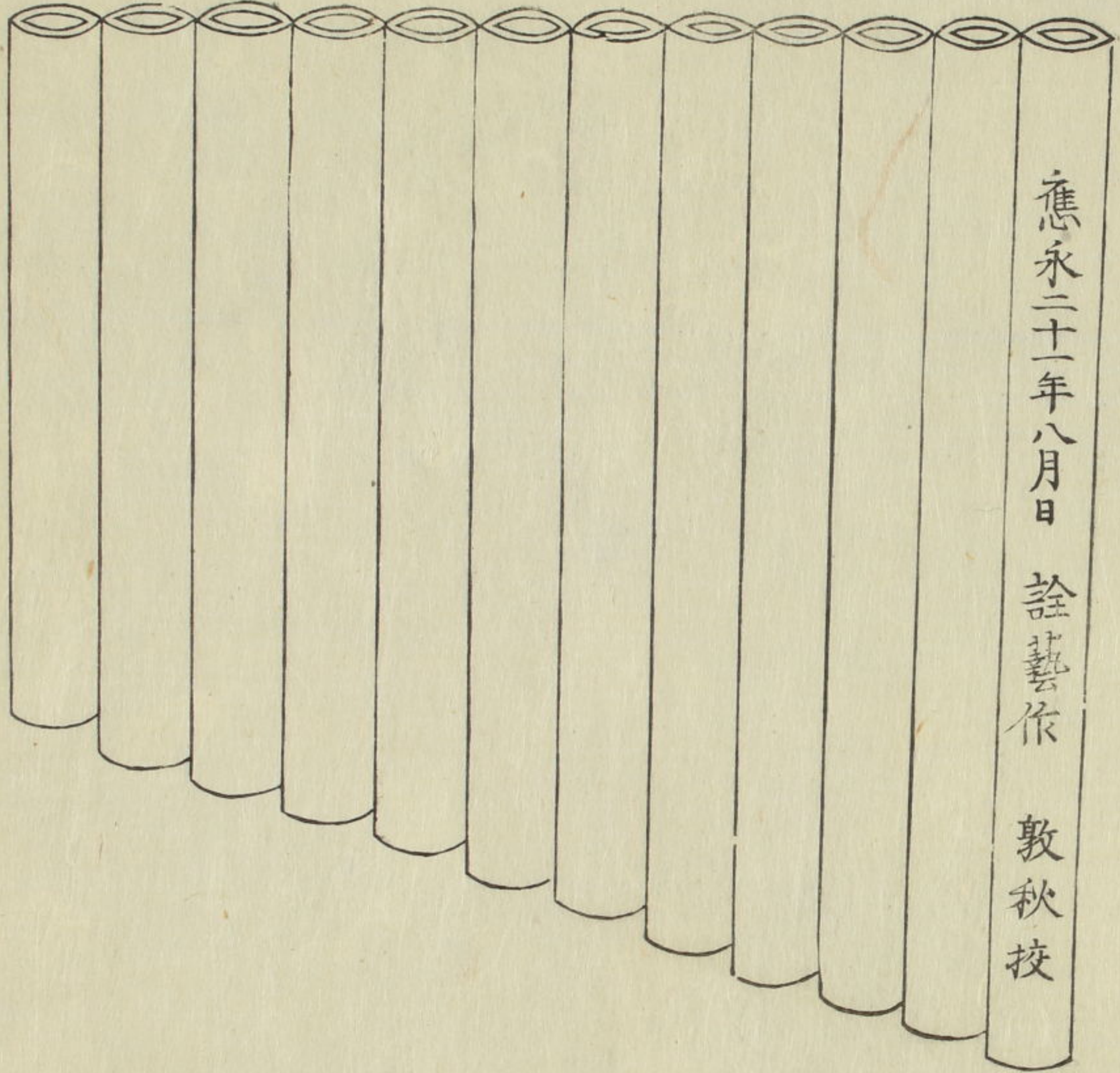


換圖  
 無患子  
 竹ノ柄ナリ

裏ニ  
 番鐘木

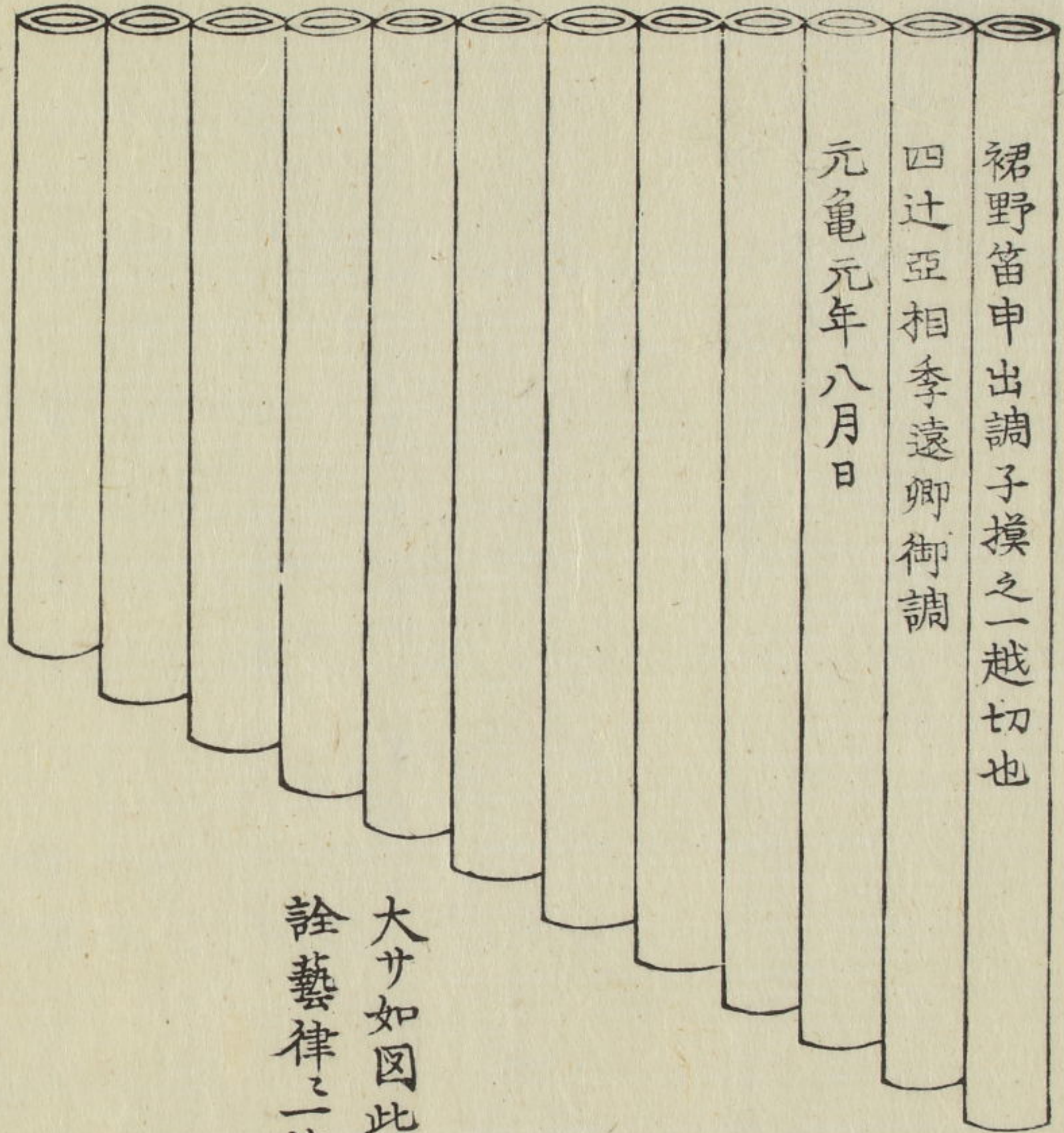
享徳元壬申八月十日移之  
 調子平調  
 恩徳院  
 住持詮藝

此辺虫喰ナリ



應永二十一年八月日 詮藝依 敷秋校

裏、恩徳院帝任ノ立字  
アリ黒漆ニテ書  
大サ如図浅黄糸ニテ  
組ム  
黄鐘律管ハ紛失レ  
タルヨレ



裾野笛申出調子摸之一越切也  
四辻亞相季遠卿御調  
元龜元年八月日

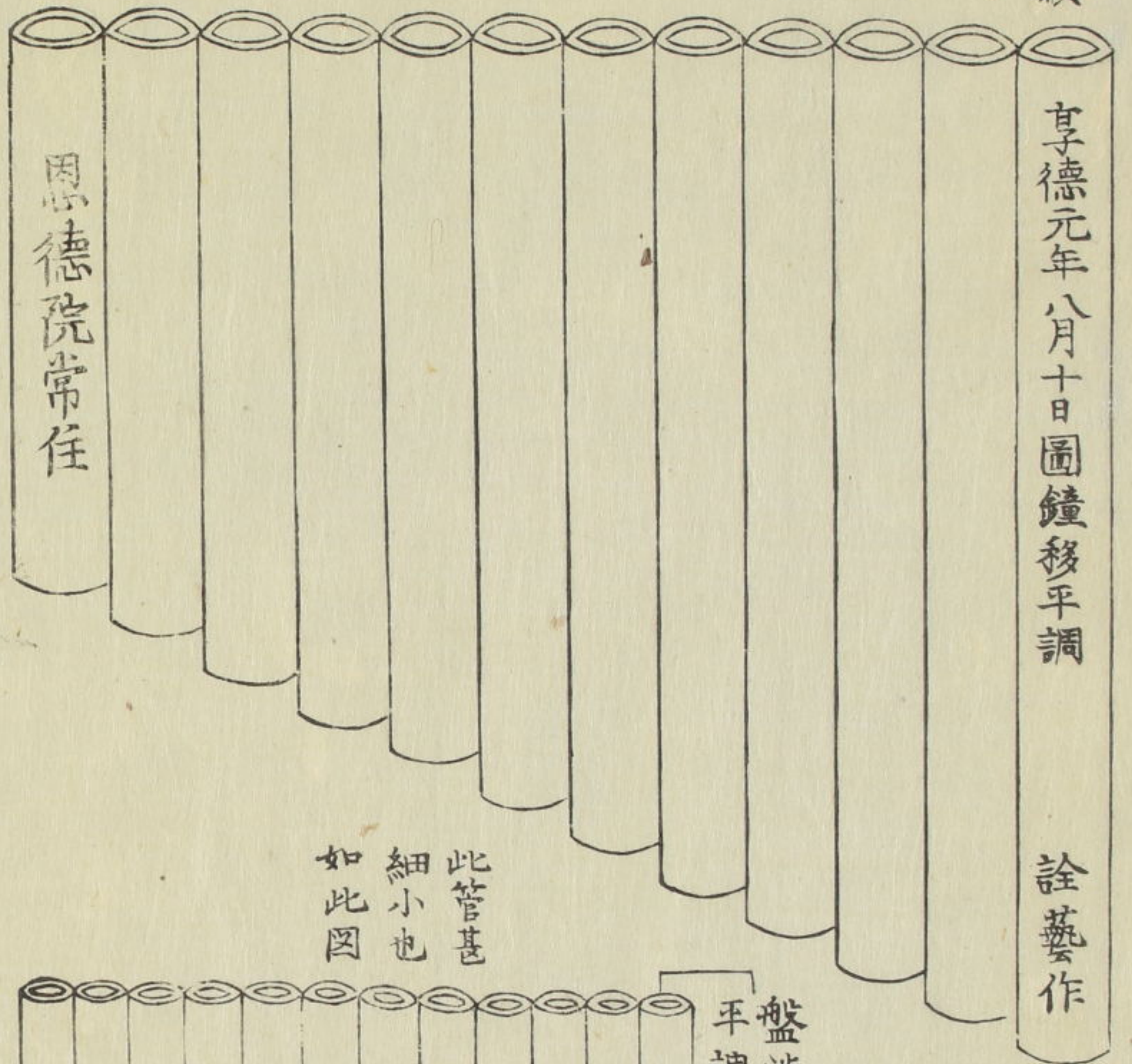
大サ如図此律甚低レ  
詮藝律ニ一律ヲ違フ

此竹ノ裏、  
恩徳院 詮純  
之五字黒漆ニテ  
書ス

春暉家藏  
スル律管、  
符合ス當今  
伶人家用ル  
律ヨリ一律  
高シ

竹管長サ  
大サ此図ノ  
如シ

享徳元年八月十日圖鐘移平調

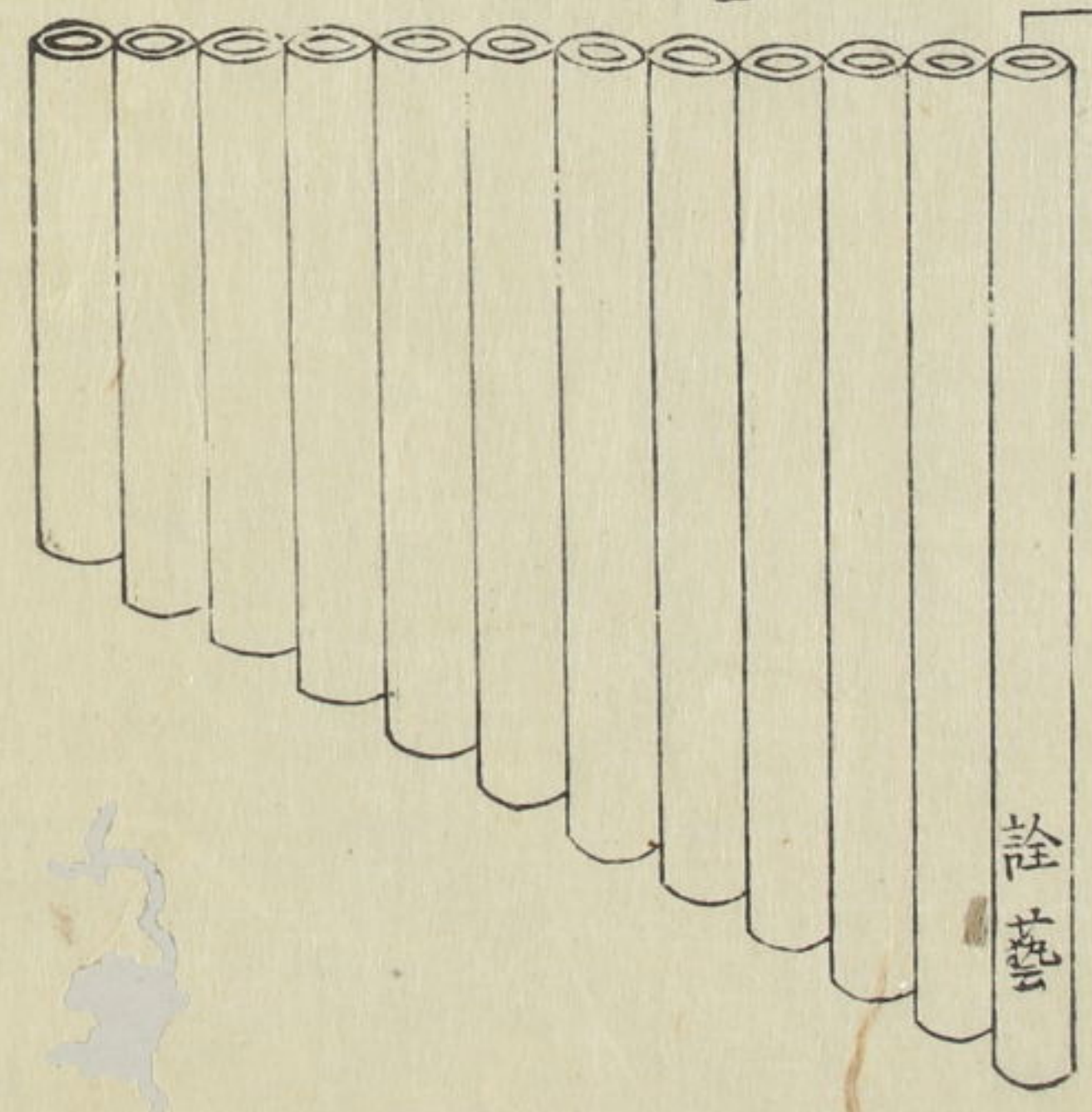


詮藝作

此管平調律ナリ平調ヲ  
官トスルモノ也

此管甚  
細小也  
如此図

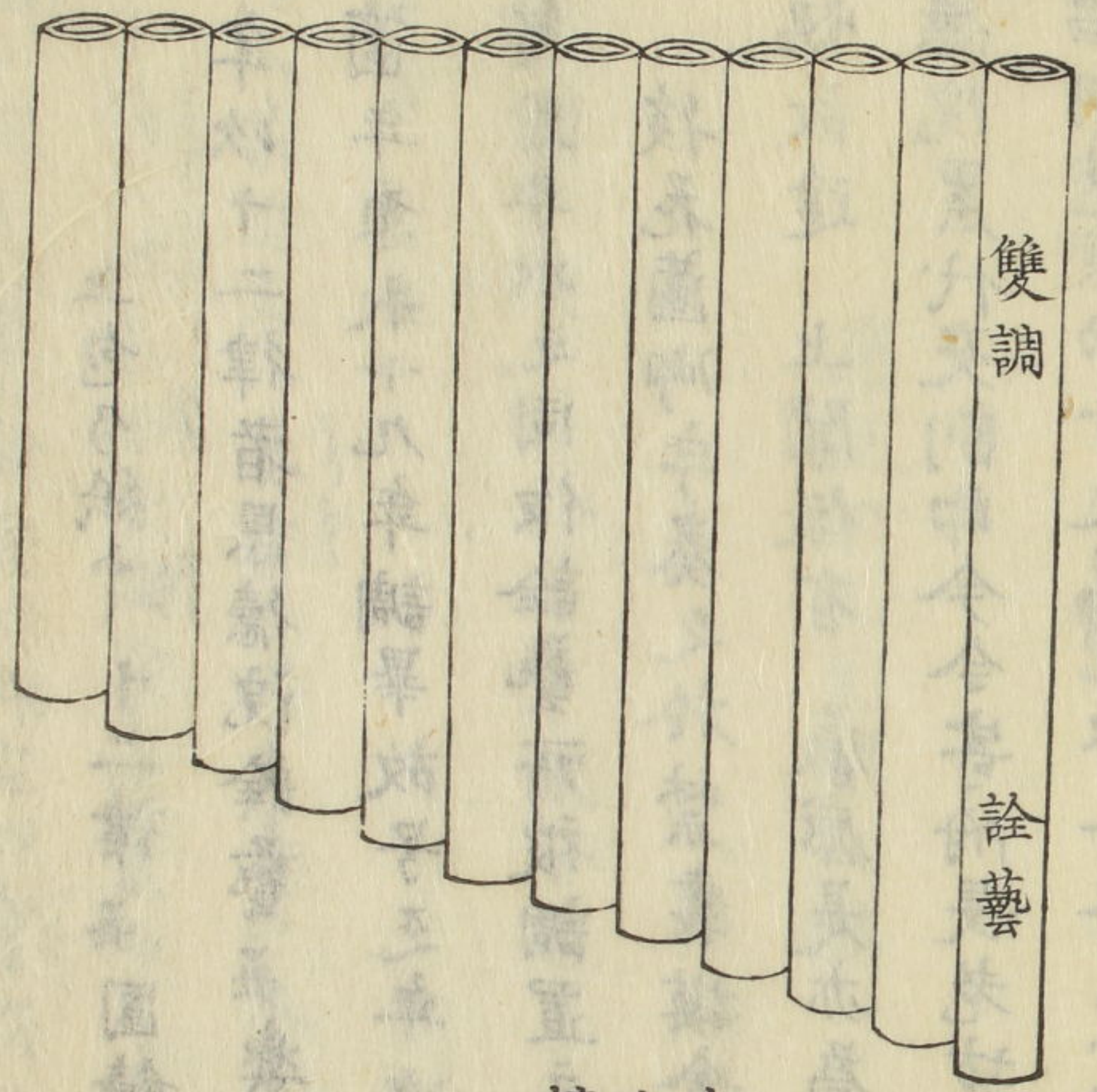
盤法律ヲ官トシ如ク其律  
平調官ノ律管ニ同シ



詮藝

雙調

詮藝



大サ如此図  
其律如平  
調官律管

寄附狀之寫

上包乃紙小 十二律并圖鐘之寄附狀トアリ

年次十二律者思德院詮藝并樂人敦秋此兩人歷十二箇年應永十九年調畢故号之年次双調切黄鐘盤涉之三管者年次之同作詮藝所被調置之也兼又平調鐘之摸者後花園御宇奏之於禁裏摸金於木金木雖異者律相協故達 上聞依有 獻感是亦為靈寶自爾以來雖為思德院累代交割即今令寄附長老坊者也皆雖非法會之器唱明梵唄助音之具也以及及末代正於衆僧之音藝我願望茲滿而已

思德院

元和三年丁巳年仲冬十五日

詮譽

遍照心院貞闇大德

法床下

右乃圖之時又及<sup>うら</sup>と紙を尚て寫し<sup>うら</sup>又<sup>うら</sup>墨<sup>うら</sup>

一伶人家近年ハ奏樂の時声音の大なるを昔ハ事小ハ<sup>うら</sup>より<sup>うら</sup>律を<sup>うら</sup>低く<sup>うら</sup>調<sup>うら</sup>つ<sup>うら</sup>近來<sup>うら</sup>めて<sup>うら</sup>右<sup>うら</sup>律<sup>うら</sup>小<sup>うら</sup>一律<sup>うら</sup>を<sup>うら</sup>た<sup>うら</sup>ふ<sup>うら</sup>程<sup>うら</sup>に<sup>うら</sup>成<sup>うら</sup>り<sup>うら</sup>たり。余<sup>うら</sup>唐<sup>うら</sup>土<sup>うら</sup>太<sup>うら</sup>古<sup>うら</sup>の<sup>うら</sup>聖<sup>うら</sup>作<sup>うら</sup>の<sup>うら</sup>律<sup>うら</sup>を<sup>うら</sup>史<sup>うら</sup>他<sup>うら</sup>國<sup>うら</sup>語<sup>うら</sup>漢<sup>うら</sup>書<sup>うら</sup>

等々考ふるふ尚との律より一律斗りきつる也。余が著るは  
所の古律考薬量述言小委しく純せり。志くれも伶工家ハ  
そ家乃事かれも余がが従ふ取用ゆるしかるも。近年  
小あり 聖上聰明ふましく純更樂律のり火妙ふ達せ  
させむいて。陛下御拔正むる漸伶工家ルそ律高くなり。余  
る考ふる聖人の古律と同じ。極よ成たり。遍照心院詮藝の律  
をゆふ。余が考ふる律と同じ。これが真徳の以近ハ古声を失ひ  
をしとる也。ふるも元龜の以ふありてハそ律今のしく低く  
りりしとる也。後代乃考ふるも委實此きるものなり

北窓瑣談後編卷之一終

（一）

